

## Never forget 3.11

ある寒い日、雲一つない青空が広がっていた。天候とは対照的に南三陸町は空襲されたような荒野と化している。鉄筋だけの防災対策庁舎、所々に集められた瓦礫、それ以外は何も残されていない。津波から二年が経とうとしているが、ここだけ時間が止まっているように見えた。

2013年2月15日、私は youth for 3.11 (<http://youthfor311.com/>) という学生団体から派遣されて、東京災害ボランティアネットワークが主催する活動にボランティアとして参加した。この活動で参加者は赤い帽子をかぶって作業するため、「赤帽さん」と呼ばれている。赤帽さんは主に仮設住宅でカフェを運営している。仮設住宅とは、津波で流されてしまった人が臨時で暮らしている住居のことである。

一世帯に割り当てられた部屋が非常に狭く、隣接しているため生活の音も筒抜けである。そのような状況で住民は、震災まで知らなかった人々と隣り合って暮らすことを強いられている。赤帽さんはそのような人達に新しい地域コミュニティを提供するために活動する。震災から定期的に仮設住宅の集会所でふれあい喫茶を開催し続けた (1)。無償で食べ物や飲み物を提供し、談笑に加わる。今では、住民同士が顔なじみになり、楽しそうに交流している。

家族を津波に流され、その記憶に今も悩まされている住人がいる。あるおばあさんは震災当時、夫と一緒に荷物を家からかき出し、車で津波から逃げようとしていた。波の音が全く聞こえなかったが、気がつくとも目の前まで波が迫っていた。夫はおばあさんに向かって「もう逃げられない！走るぞ！」と言って車から飛び出して走り始めた。彼女も慌てて車から出て、夫を追いかけた。しかし、二人とも津波に飲み込まれてしまった。おばあさんは荷物を持っていなかったのも、なんとか波から顔を出すことができた。気がついたら水田があった場所に打ち上げられていた。一方、リュックを背負っていた夫は帰らぬ人となった。彼女は震災の記憶を語ったあと、こう付け加えた。「いまは仮設住宅に一人で暮らす生活、正直寂しいですね。自分の未来に希望も持てません」

家族を失っても、希望を捨てずに生きている人もいる。

あるおばあさんは「人間、体一つあれば何でもできる！」と断言した。そのおばあさんは最近ジムに通い始め、水泳を始めたという。最初は水の中で歩くことすらままならなかったが、今では泳げるようになった。彼女は興奮しながらこう話す。

「人間挑戦し続けるもんだね！来年は富士山に登ろうと思っているんだよ！」

活動最終日、ある女性が私にお礼を言ったのと同時に、こう付け加えた。「もう帰っちゃうれしいけど、どうかこの町で起こったことを忘れないでください。そして、いまでも私たちは仮設住宅で暮らしていることを忘れないでください！」

(1)赤帽さんの活動は2013年3月をもって終了している。